



# 箕面市 架け橋期カリキュラム



令和7年(2025年)3月  
箕面市教育委員会



# はじめに

## ～一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上のために～

令和5年度に、子どもが健やかに成長できるための基本方針となる「こども基本法」や「こども大綱」が定められ、また、それらに基づき「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン(はじめの100か月の育ちビジョン)」が発表されました。はじめの100か月とは、母親が妊娠してから小学校1年生の途中までの約100か月を指すもので、この期間に子どもはさまざまな人、もの、環境との出会いを繰り返しながら育ちます。このビジョンでは、その大切な時期に、教育、健康、福祉などの施策を総合的に推進し、誕生から入園・入学、家庭と関係機関・地域のつながりなど、子どもの成長に応じて生じる環境の変化が、育ちの「切れ目」とならないよう、すべての子どもの育ちを社会全体で支えるための基本的な考えが示されています。

従前からの動きとして、幼児教育の分野においては、平成29年3月に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(以下、「3要領・指針」という。)が改訂され、幼稚園・保育所・認定こども園といった3歳以上児の保育を行う施設はすべて「幼児教育を行う施設」であることが明記されました。さらに、「3要領・指針」すべてに同じ表現で「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」として、3つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むように努めることや、活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の小学校入学前の具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)として示されました。

また、3要領・指針と同年に改訂された「小学校学習指導要領」総則では、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえた指導を工夫することにより、3要領・指針に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」と明記されました。このことは、小学校1年生がゼロからのスタートではないことを意味し、幼児教育と小学校教育の教育課程をつなぎ、資質・能力を幼稚園・保育所・認定こども園、小学校といった種別を越えて育み、生涯にわたる「生きる力」を培うことをめざすことが示されています。

これらのことは、幼児教育において遊びを通して小学校以降の学びの基礎を培い、小学校ではその学びの芽生えをさらに伸ばしていくことが重要で、「切れ目」なく子どもの育ちを支えるためには、幼児教育と小学校教育の接続が欠かせないことを意味しています。

本市はこれまで、公立の保育・幼児教育施設を中心に小学校との交流活動などを行ってきましたが、公立園は民営化や統合、認定こども園化といった動きにより、施設数が減少してきました。その一方で、多様な保育サービスを提供する私立・民間園は増加しており、小学校区内に私立・民間の園しかない校区が増加傾向にあります。

そういった背景を踏まえ、本市では、公立・私立・民間、そして、幼稚園・保育所・認定こども園といった多様な施設種別の垣根を越えた取り組みの一つとして、子どもの「交流」に加えて幼児教育と小学校教育の教育課程を「接続」する取り組みである「架け橋プログラム」に係るプロジェクトをスタートしました。

プロジェクトは、萱野小学校区をモデル地域に設定し、「架け橋期カリキュラム開発検討会議」及び「ワーキンググループ」を設置して、令和4年度からの3年計画で進めました。これらの会議では、公立・私立・民間、それぞれの保育・幼児教育施設、小学校、保護者など、子どもに関わるさまざまな立場の大人が顔を合わせ、幼児期と児童期双方の教育活動について子どもの姿から話し合いました。このようなプロジェクトを始めるまでは、保育・幼児教育施設、小学校で別々に存在していたカリキュラムについて、互いのカリキュラムを確認し合ったり、自身や他施設の教育活動を架け橋の視点で見つめる機会が乏しかったためです。

「架け橋期カリキュラム」は、保育・幼児教育施設と小学校双方の関係者が、子どもの「これまで」と「これから」という「学びの連続性」や「育ちの連続性」を俯瞰して意識できるよう、そして、それぞれの教育活動の工夫を知り、自身の教育活動を見つめ直すことができるよう、「共通の視点」で確認しまとめたものです。

保育・幼児教育施設や小学校は、架け橋期カリキュラムを活用しながら教育活動を実践し、今そこにいる子どもが「安心して過ごせること」を検証軸において、将来にわたり実践・検証・見直しを続けることが肝要です。教育委員会では引き続き教育の現場とともに、架け橋プログラムに係る施策を進めていきます。

架け橋期カリキュラムが、保育・幼児教育施設や小学校それぞれのカリキュラム・マネジメントと連動し、その実効性が高まることで、架け橋期の教育内容が一層充実し、豊かな子どもの育ちにつながることを期待します。

箕面市教育委員会



# もくじ



■はじめに	1
■第1章 箕面市の架け橋プログラムの取り組み	
1. 概要と課題	6
2. 箕面市における「めざす子どもの姿」のつながり	6
3. 架け橋プログラム事業	7
4. モデル地域における取り組み	7
■第2章 取り組みを通しての気づきと架け橋期カリキュラムの考え方	
1. 保育・幼児教育と小学校教育のつながり	10
2. 教育活動の相互理解(ワーキンググループでの見学と語り合い)	10
3. 取り組みを通じた気づき	12
4. 架け橋期カリキュラム作成	14
5. 共通の視点	14
6. 人権を尊重する保育・教育とすべての子どもにとって円滑な接続	16
7. 架け橋期カリキュラム開発検討会議、ワーキンググループに参加して	18
■第3章 箕面市架け橋期カリキュラム	
～カリキュラムの全体像～	
●架け橋期カリキュラムについて	20
●架け橋期カリキュラム	22
～事例集～	
●架け橋期の事例について	25
●5歳児事例の見方	26
●1年生事例の見方	27
●幼児期の終わりまでに育てほしい姿(10の姿)について	28
●事例	30
①5歳児・1年生共通の事例	
②5歳児の事例	
③1年生の事例	
～ヒント集～	
●1年生ワクワクスタートのヒント	60
■箕面市架け橋期カリキュラムの特徴と意義	68
■参考資料	72
■名簿	74

# 第1章 箕面市の架け橋プログラムの取り組み

## 1. 概要と課題

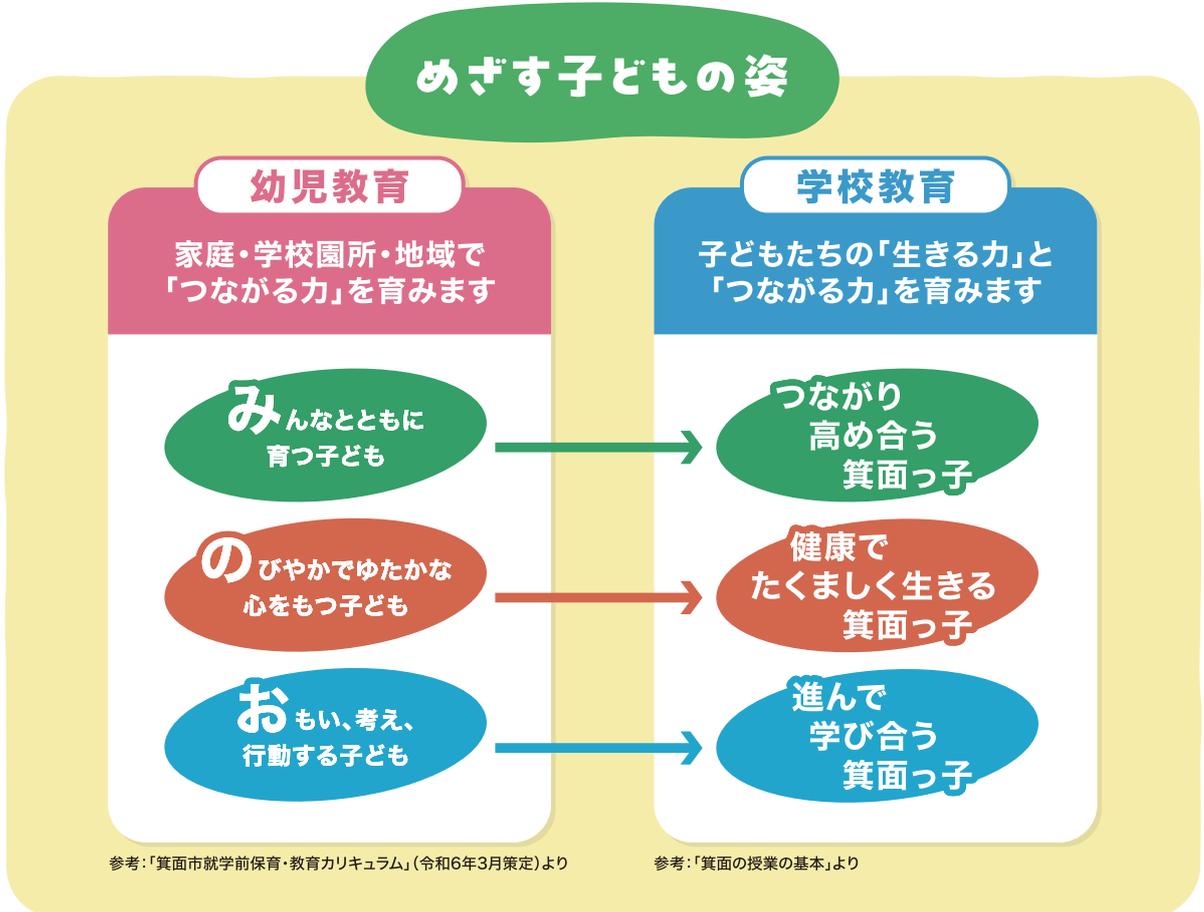
平成29年に3要領・指針及び小学校・中学校学習指導要領が改訂されています。

文部科学省では、「幼保小接続期の連携の手掛かりとして『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』(10の姿)が策定されるなどの成果がある一方で、半数以上の園が行事の交流などにとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない、スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』(10の姿)だけでは具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善方法が分からない」といった課題が指摘されています。

## 2. 箕面市における「めざす子どもの姿」のつながり

幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期です。幼児教育においては遊びを通して学びの芽生えを培い、小学校ではその学びの芽をさらに伸ばしていくことが重要です。そのためには、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が欠かせません。

発達段階や教育方法に違いがあることから、一見異なるものに見える幼児教育と小学校教育ですが、「資質・能力」を育むこと、また「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」といった考え方には連続性や一貫性があり、幼児期と児童期の子どもの発達や学びはつながっています。



### 3. 架け橋プログラム事業

箕面市では、令和4年度から文部科学省「幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業」を受託し、萱野小学校区をモデル地域として、架け橋プログラム事業を進めてきました。

箕面市内のどの地域においても、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を進める必要があります。教育課程をつなげる観点から「カリキュラム」の策定が必要と考えました。モデル地域のみなさんによる協力のもと、幼児教育と小学校教育のそれぞれの教育活動を相互に知り、教育課程のつながりを共通の視点で「見える化」した「架け橋期カリキュラム(素案)」を令和5年10月に作成しました。さらに、「架け橋期カリキュラム(素案)」の実践検証をモデル地域で進め、令和6年7月に架け橋期カリキュラム開発検討会議において「箕面市架け橋期カリキュラム」としてまとめました。

### 4. モデル地域における取り組み

#### ■架け橋期カリキュラム作成プロセス

##### 1年目(令和4年度) 土台づくり

「架け橋期における接続の意義」に関する学習会(学識経験者による研修)や、施設見学などを通じて、関係者間の顔合わせ、各施設における取り組みや子どもたちの実態共有、意見交換などの土台をつくることを目的に活動。



##### 2年目(令和5年度) カリキュラム(素案)の作成

- ・1年目の取り組みを継続しながら、幼児期に育まれる資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)が小学校の教科などにどのように接続していくのか、検討会議で意見聴取。
- ・検討会議での意見を踏まえ「架け橋期カリキュラム(素案)」を作成し、本市のモデル地域である萱野小学校区(萱野小学校、かやの幼稚園、萱野保育所)で実施・評価。



##### 3年目(令和6年度) カリキュラムの完成

- ・1・2年目の取り組みを継続しながら、モデル地域での実践を引き続き行い、評価を反映させた「架け橋期カリキュラム」を完成。
- ・完成した「架け橋期カリキュラム」を保育・幼児教育施設及び小学校へ周知するとともに、市内全域で持続可能な運用方法の検討。

## ■架け橋期カリキュラム開発検討会議・ワーキンググループ

「架け橋期カリキュラム」を社会に開かれた教育課程にするため、さまざまな立場のかたで構成される「架け橋期カリキュラム開発検討会議」を設置しました。

また、同会議に参加している小学校、公立・私立・民間の幼稚園・保育所・認定こども園の職員で構成された「ワーキンググループ」において開発検討会議の意見をもとに、施設見学や意見交換などを行うことで互いの教育活動やその工夫を知り、幼児期と児童期のつながりを考え、カリキュラムを作成しました。

### 架け橋期カリキュラム開発検討会議

- ・方針の決定
- ・さまざまな立場のかた(校長、公立・私立・民間園長、保護者、学識経験者)との意見交換



### ワーキンググループ

- ・施設種別の垣根を越えた職員同士の関係づくり
- ・それぞれが行っている教育活動の内容について語り合い、相互理解の促進
- ・開発検討会議で決定した方針などをもとにカリキュラムの開発
- ・開発したカリキュラムなどの実践・検証



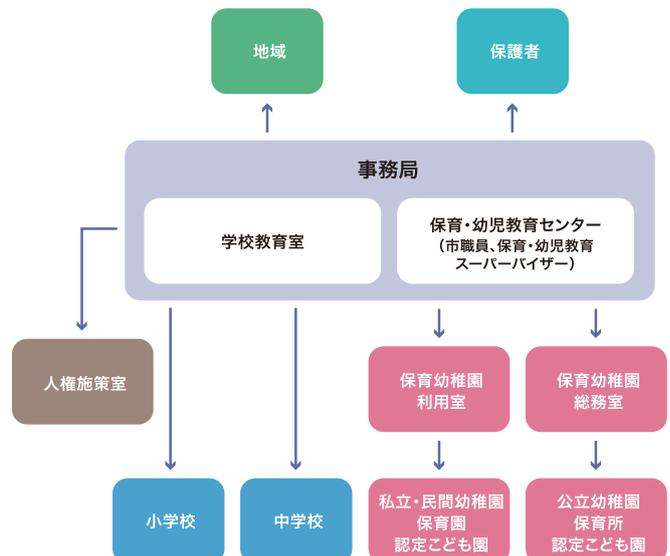
## ■体制図など

体制(架け橋期カリキュラム開発検討会議)

役割	所属など
会長	子ども未来創造局 担当部長 (箕面市教育委員会)
委員	箕面市立萱野小学校 校長(※)
委員	箕面市立かやのこども園 園長(※)
委員	箕面保育園 園長(※) (民間保育連盟より推薦)
委員	こども園 アサンプション国際幼稚園 園長(※) (私立幼稚園連盟より推薦)
委員	架け橋期保護者 3名
コーディネーター	大阪総合保育大学 児童保育学部 教授(包括連携協定締結大学) 【役割】 ・会議、ワーキンググループへの出席・助言 など

(※)の所属から派遣された職員でワーキンググループを構成。

箕面市教育委員会事務局





## 第2章

# 取り組みを通しての気付きと 架け橋期カリキュラムの考え方

## 1. 保育・幼児教育と小学校教育のつながり

### 「学びの芽生え」と「自覚的な学び」

保育・幼児教育の「学びの芽生え」を生かし、小学校教育の「自覚的な学び」につながるように、小学校では合科的・関連的な指導を進める中で、子どもの不安や緊張を解消し、育ちや学びの連続性を保障していくことが必要です。

#### 保育・幼児教育

##### 学びの芽生え(遊びを通じた学び)

学ぶということを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、さまざまなことを学んでいくこと。



#### 小学校教育

##### 自覚的な学び(教科学習での学び)

学ぶということに意識があり、集中している時間とそうでない時間(休憩の時間など)の区別が付き、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めること。

※幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？  
(幼児教育及び小学校教育関係者向けの参考資料)



## 2. 教育活動の相互理解(ワーキンググループでの見学と語り合い)

幼稚園・保育所などの保育・幼児教育施設と小学校、立場の違う職員が、互いの教育活動や子どもの様子を見学しました。見学を通して、知っているようで知らない互いの教育活動やその中での子どもの育ち、共通点や違いについて語り合い、子どもの姿を軸に相互理解を深めました。

## 保育・幼児教育と小学校教育の特徴や違い

	保育・幼児教育	小学校教育
時間・枠組みなど	<ul style="list-style-type: none"> <li>●子どもの興味や関心に合わせる</li> <li>●知りたい、やってみいたい時に始める</li> <li>●たっぷり遊び、達成感、満足感を得る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●週の時間や時間割がある</li> <li>●45分の授業をコーディネートする</li> </ul>
教材	決まった教材や教科の区別がない (子どもの気付き・発見から始まる)	各教科の活動で、教科書など共通の教材を使う
学び方	<p>豊かな経験を十分に</p> <hr/> <p>遊びや生活の中のさまざまな体験を通じた学びの芽生え</p> <hr/> <p>一人ひとりそれぞれのゴール</p>	<p>学びを精選 (どこにスポットをあてるか、 どこで学びを深めるか)</p> <hr/> <p>単元や題材、内容や時間のまとまりを見通す 学びを整理し、自覚的な学びへ (板書など)</p> <hr/> <p>ゴールを設定</p>
気付きと言語化	気付きを大切にしますが、言語化するところまで至らないこともある	気付きを言語化 気付きや、考えのアウトプットにより、気付きが深まり、対話を通して学びが質的に深まる
集団	初めての集団生活を送り、共通の体験を通して育つ	いろいろな地域からさまざまな体験を重ねた子どもたちが集まり、学校生活が始まる

## それぞれの工夫

### 保育・幼児教育

- ・さまざまなことに関心をもてるような環境構成(心が動く仕掛け)
- ・自分なりに見通しがもてることを大切に(時間の見える化)
- ・一人ひとりの心の動きや学びを集団に共有
- ・個人の興味や関心に合わせた遊びと集団活動のバランスを考えた活動の組み立て
- ・友達と相談したり、発表したりする場の設定

### 小学校教育

- ・幼児期に経験したことを取り入れる
- ・弾力的な時間の運用(入学当初)  
短い時間を積み重ね、授業を構成  
(45分の授業時間にとらわれず、柔軟に学習時間を設定する学習方法など)
- ・自ら気付く、自ら考えるための関わり
- ・体験や体を動かす活動を取り入れた学習
- ・教師と子ども、子どもと子どもをつなぐことを意識

### 3. 取り組みを通した気づき

#### 「安心」

学びに向かう姿勢は、幼児教育の場でも、小学校教育の場でも「安心」できる環境のもとで発揮されます。

幼児教育の場において、子どもが安心して過ごせることは、すべての学びの芽生えを育むための土台となります。乳幼児期にふさわしい体験ができるよう整えられた環境のなかで、「温かいまなざし」に見守られながら、子どもが安心感をもって自ら手を伸ばし、ものや人に関わり表現することは、生涯の学びへとつながっていきます。また、その毎日の積み重ねは「主体的な活動」の基礎となります。

小学校教育の場において、幼児教育の経験の上に学びが積み重なっていくことを意識することは、教師が子どもの行動を信頼したり、それまでの経験を聞き取ったりするなど、子どもを尊重することや子どもにとっての安心感にもつながります。特に入学当初は、まず不安なく登校し過ごせること、正解不正解に関わらず発言したことを認められること、学校内でのつながりをつくることなど、安心して過ごすことができる環境づくりが「主体的な学び」の基盤となります。

#### 「育ちの連続性」

5歳児から小学校1年生の2年間だけでなく、子どもの育ちには連続性があり、誕生からの子どもの育ちや経験が生涯の学びへとつながっていきます。

教育の場においても、入園・入学前の子どもの育ちを理解するとともに、その後の育ちを見据え、連続する育ちの中で子どもを捉えることは、子どもの良さに気づき、子どもを認めるきっかけにもなります。幼保小の連携だけでなく、小中の連携においても同じことが言えます。



## 「それぞれの時期にふさわしい学びの重要性」

幼児教育は小学校教育を前倒しするものではありません。

対象となる子どもの年齢によってその教育内容や方法はさまざまですが、幼児教育と小学校教育のどちらかがもう一方に合わせるのではなく、その時期に適切な教育を実施していくことが必要で、それぞれの教育はいずれも価値があると言えます。

幼児期の遊びには、幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれており、自発的な活動としての遊びは、幼児教育特有の学習でもあります。幼児教育は「環境を通して行う教育」が基本です。子どもが一人ひとりの発達、興味や関心に応じて、心を動かして身近な環境に主体的に関わり、遊びや生活という体験を通した育ちの過程において、試行錯誤しながら総合的に資質・能力を身に付けられるよう、保育者は環境を整えることが必要です。

小学校以降に進められている『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の視点から授業改善につなげていく」という教育の方向性は、「環境を通して行う教育」を柱にしながら、子どもそれぞれの興味や関心や一人ひとりの個性に応じた多様で質の高い学びを引き出そうとする幼児教育の考え方とつながっています。

乳幼児期に遊びや生活を通して培った「資質・能力」が小学校以降の学習の土台となり、学びの芽生えを小学校以降の教育においてさらに伸ばしていくことが求められます。

## 4. 架け橋期カリキュラム作成

これまで保育・幼児教育施設、小学校のそれぞれの教育施設において、架け橋期における活動や配慮などを含む教育計画などが用意されてきました。しかし、それを見せ合い、語り合うようなことはなく、互いを知らないまま、教育活動を行ってきました。

架け橋期カリキュラムには、5歳児と小学校1年生を一体的に捉え、それぞれの教育活動や配慮が見えるように記載しています。卒園後の育ちを見通した、また、入学前の育ちを踏まえた取り組みが行われ、すべての子どもたちが、保育・幼児教育施設から小学校へ円滑に接続されることを期待します。

### それぞれの指導計画

全体的な計画など(保育・幼児教育施設)		教育指導計画(小学校)	
0歳児～	5歳児	小学校1年生	小学校2年生～

### 一体的なカリキュラム

5歳児	小学校1年生

### 1年生はゼロからのスタートではない

- ・誕生からの積み重ねが生涯の学びにつながる
- ・1年生から2年生、2年生から3年生、小学校から中学校へも同じ

## 5. 共通の視点

見学や語り合いを通して、共通の視点としてきたのは、主に「**資質・能力**」(3つの柱)「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」(10の姿)「**教科とのつながり**」です。

### 共通の視点I「資質・能力」(3つの柱)

幼児教育の中では、その基礎となる資質・能力の3つの柱(「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」)を環境への関わりを通じた自発的な遊びの中で育てることが「3要領・指針」に示されています。

幼児期の遊びの中で、「資質・能力」が一体的に生まれ、それが小学校教育へとつながっていきます。

また、小学校学習指導要領は、幼児期の教育を通して生まれた「資質・能力」を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に学びに向かい、幼児期に生まれた「資質・能力」をさらに伸ばしていくことを示しています。

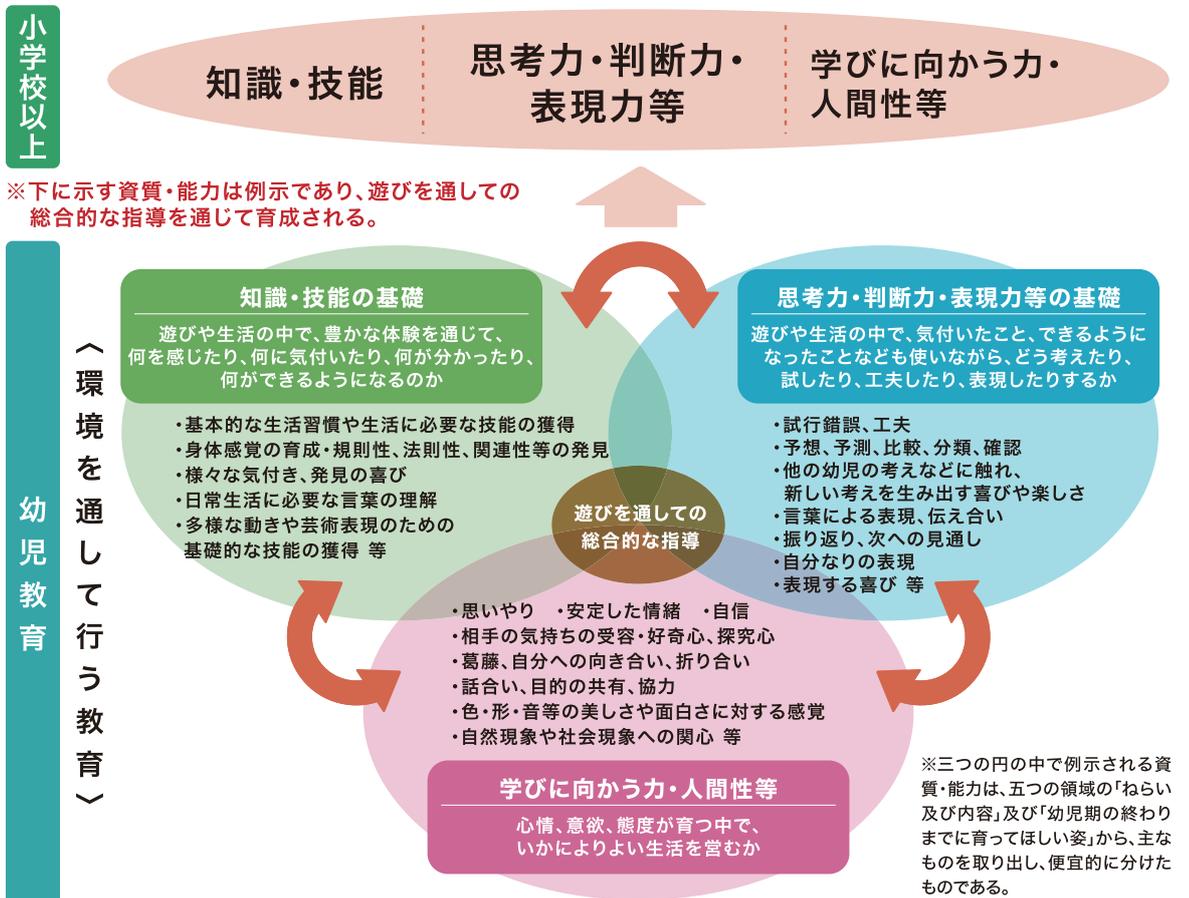
## 共通の視点II 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)

保育・幼児教育施設において、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼児教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿で、特に5歳児後半に見られるようになる姿です。

幼児教育においては「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を念頭において小学校以降の生活や学習の基盤となる資質・能力を育成し、小学校教育においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を踏まえた指導を工夫することにより、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにする必要があります。

### 幼児教育において育みたい資質・能力の整理

資料1



### 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージ

資料2



## 共通の視点Ⅲ「教科とのつながり」

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を通して幼児期の遊びを捉えると、一つの活動にいくつもの育ちの姿があることに気づき、幼児期の遊びが「総合的な学び」であることが実感できます。また、具体的にさまざまな教科における学びの土台となっていることを知ること、改めて幼児期の遊びが教科での学習につながっていることを確認することができます。

小学校学習指導要領には、学校段階等間の接続として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)「資質・能力」について、以下のように記載されています。

小学校学習指導要領 総則(平成29年改訂)

### 4 学校段階等間の接続

教育課程の編成に当たっては、次の事項に配慮しながら、学校段階等間の接続を図るものとする。

- (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

## 6. 人権を尊重する保育・教育とすべての子どもにとって円滑な接続

本市における人権教育の推進に当たっては、「新箕面市人権教育基本方針」の主旨を踏まえ、児童生徒の自尊感情を高め、人権について、よく知り、よく考え、自他を大切にすることができる人権感覚を育み、社会の一員として、人権意識の高い行動ができ、個々の自己実現へ向かいながら、よりよい社会づくりに参画できる力を涵養していくことが重要であるとされています。また、そのためには、教職員自らが人権意識の向上に努め、学校・家庭・地域との連携を深めていくことが肝要です。

子どもの育ちは誕生からの積み重ねによるもので、遊びや生活を通して育まれた人に対する愛情や信頼感は小学校以降の教育の土台となります。保育者は、一人ひとりに寄り添い、個々の子どもを尊重し、夢中になって遊ぶことを支えることで人との関係をつなぎ、幼児期なりの人権意識や人権感覚を育みます。子どもは、自他ともに大切な存在であることを実感し、自己主張のぶつかり合いによる葛藤なども含めたさまざまな体験を通して、自分の感情や意思を表現し、互いを理解することにつながっていきます。

また、幼児期から一人ひとりの子どもが、文化、国籍、性別、生まれ育った環境の違いや障害

の有無に関わらず、「一個の人格をもつ主体」「権利の主体者」として大切にされ、人に対する愛情や信頼感が育まれ、個別最適な学びが保障されることが必要です。

さまざまな支援や配慮を要する(特別支援教育、外国にルーツをもつなど)子どもにとって、接続期の環境変化は大きな影響を及ぼします。一人ひとりの幼児期の育ちを小学校教育へ積み重ねていくためには、必要な支援や配慮を継続させていくことが重要です。具体的には、保護者と教育委員会、小学校、保育・幼児教育施設などの面談、小学校の教職員による入学前の就学前保育・教育施設の見学、就学引継シートの活用など子どもを取り巻く大人同士が連携を図りながら、それまで培ってきた子どもの育ちや必要な支援、配慮について情報を共有し、必要な基礎的環境整備や合理的配慮を行い、小学校生活への円滑な移行を支援することが大切です。

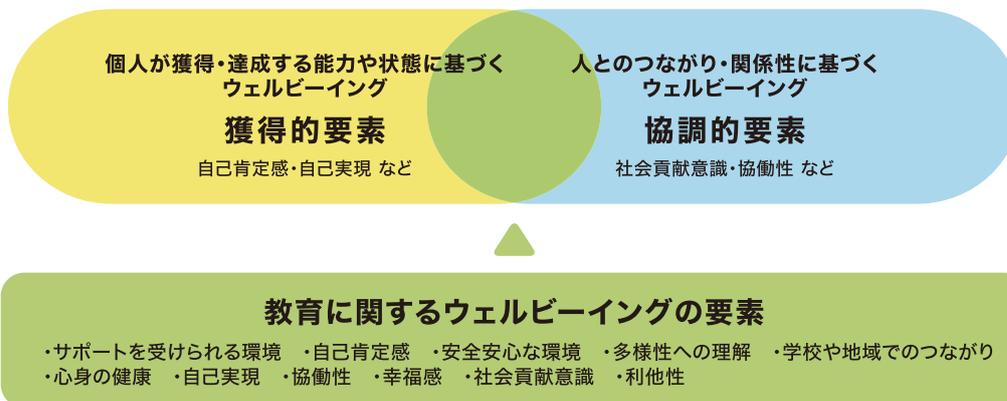
幼児教育から小学校教育へと学びの場が変わっても、一人ひとりの人権が尊重され、安心して主体的に学ぶことができるよう環境を整え、保育・幼児教育施設から小学校への円滑な接続を図ることをめざします。

## コラム 「ウェルビーイング」ってなんだろう？

- 身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含む概念
- 多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じるとともに、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念

自己肯定感や自己実現などの獲得的な要素と、人とのつながりや利他性、社会貢献意識などの協調的な要素を調和的・一体的に育み、「調和と協調」に基づくウェルビーイングを、教育を通じて向上させることが重要です。

### 調和的・一体的に育む教育に関するウェルビーイングの要素の実現



参考:文部科学省『第4期 教育振興基本計画(令和5年6月閣議決定)』

## 7. 架け橋期カリキュラム開発検討会議、ワーキンググループに参加して

### コメント 架け橋期カリキュラム開発検討会議

#### 箕面市立かやのこども園 園長 廣田 尚美 氏

「園は小学校を、小学校は園を」互いにそれぞれの施設で行っている工夫や内容などを知り、環境や声かけ、活動などを意識していく必要があると感じることができました。5歳児から小学校1年生までを「架け橋期」として位置付けていますが、園では小学校への接続を意識し、0歳から子どもたちの力を積み上げていくことを考えることが大切だと思いました。

#### 箕面保育園 園長 辻 陽子 氏

参加したことで園の子どもと小学校の子どもを比較し、自身の園の保育内容や活動について見直すことができ、円滑な接続をめざすためには、お互いに子どもを見て意見交換することがとても重要だと実感できました。

また大人同士のつながりが子どもの安心につながるとも思いました。ワーキンググループや園と小学校のように顔見知りの関係になっていれば、子どもたちが安心して生活を送れるようになると思うので、つながりが必要だと感じました。

#### こども園アサンプション国際幼稚園 常任理事 丹澤 直己 氏

私自身教員として多くの学びや気づきがありました。特にコロナ禍を経て新たな教育の方向性に学校が目線を変えている時期に、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿などを手掛かりとして幼児教育と小学校教育が一体となるカリキュラムを作成することで改めて幼保小の連携を見直すことができました。

この事業を幼保小で終わるのではなく、中学校にもつなげ、幼保小中の一貫教育をめざしてほしいと思います。

#### 箕面市立萱野小学校 校長 佐藤 秀昭 氏

萱野小学校では架け橋プログラム事業と小中一貫教育を進めており、これからは校種間のつながりが重要になると実感しました。3年間参加し、参加した教員から「得られるものがありました」「子どもたちを違う視点で見ることができました」と聞くことができ、実りある取り組みでした。今後市内全域に広げるに当たり、校区の実情に応じて仕組みをつくっていくなど考えなければならないと思います。

#### 架け橋期保護者 貝原 敦 氏

参加して、この取り組みは子どもにとってとても意義があると感じています。小学校が幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識した授業をすれば、子どもは安心して小学校に接続できるようになると思います。ただ、このカリキュラムが子どもを評価するものにはなってほしくはありません。誰一人として取り残さない総合的なカリキュラムとなれば嬉しいです。

#### 架け橋期保護者 浅香 知佳 氏

まずは保護者として、小学校の先生のリアルな現場や工夫などを見て知ることで、入学に対して抱いていた不安が解消されました。子どもに何かあったら、「小学校の先生に聞いてみよう」と考えたり、子どもに「たぶんこうだと思うよ」と伝えることができたのは、この会議に参加していたからです。また、子どもとの会話や対応などについて、学んだことを意識することで、今子どもとの関係がすごくいいなと実感しています。

#### 架け橋期保護者 平尾 ゆりか 氏

参加したことで、小学校の授業や行事にはそれぞれ目的やねらいがあることを知ることができました。参加する以前より学級通信やおたよりのねらいや目的に注目するようになり、子どもへの声かけなどにも生かしました。このようなことは他の保護者も求めていると思いますので、どんどん保護者を巻き込んでほしいと思います。

## 保育・幼児教育施設



### 園の活動と教科のつながり

幼児期の遊びは小学校の学習につながっているということを具体的に教えてもらい、今行っている保育の根拠と自信につながりました。**幼児期の遊びが小学校の自覚的な学びにつながることを再認識**し、これからの育ちを見通した保育を意識するようになりました。

### 学校を知る

学校見学や意見交換を通じて、子どもたちの**小学校での姿や学校の工夫、授業づくりを知る**ことができました。園でも、子どもたちの主体性を意識した活動や言葉かけを意識するようになりました。また、保護者からの小学校への不安などについての質問に、自信をもって答えることができました。

### 先生同士のつながり

保育者と小学校の先生が顔の見える関係となることは、**子どもの安心**にもつながると気付きました。交流していても先生同士が気さくに話す姿はその場の雰囲気を変え、子どもたちの安心にもつながっています。今後も先生同士がつながる場があればいいなと思います。

## 小学校



### 園での学び・経験を踏まえた声かけや工夫

「知っている?」「やったことある?」と幼児期に経験したことを尋ね、**子どもが知っていることを認めた上で**少しだけ新しいことを伝えることで、子どもは安心して行動することができ、**子どもたちとの信頼関係**を築くことにもなりました。

### 授業の工夫・改善

子どもたちにはまだできないと思っていたことが、実際はできることが分かり、**教材開発やカリキュラムの模索**の幅がひろがりました。子どもたちがどこまでできるのかが**見通せる**ようになり、判断ができるようになったことで、取り組み方が変わりました。

### ゼロからのスタートではない

1年生には、「一からがんばって教えなければならぬ」と思っていました。が、**1年生は何も知らない子どもではない**こと、また「やったことがないからできない」と思っていました。が「やったことがあるけど、やりかたが違うから、しない、できない」ということが分かりました。